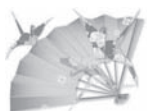


説以一物即不中



札幌市医師会
石川内科クリニック

石川直記

北海道医報から原稿依頼が来るまで、今年6度目の年男になるとは思ってもみませんでした。還暦から古稀までの何と早かったことか。この先、もっと早く時間が過ぎるかと思うと心細くなります。

話は変わりますが、私の家の宗旨は禅宗、曹洞宗です。毎朝お参りをしますが、特別信仰心があついわけではなく、ご先祖への朝の挨拶というか習慣です。仏壇と並んで床の間があり、軸を掛けていますが、いつも「仏心」や「無事」の同じ軸です。何か別の軸をと思い、茶道を趣味にしていた親の軸から「説以一物即不中」を見つけ、掛けてみました。軸に書かれた禅語七文字の意味を知りたく調べてみたところ、有馬頼底著『茶席の禅語大辞典』に分かりやすく解説してあったので引用させていただきます。

唐の時代、曹洞宗六祖慧能禅師のところへ、のちに七世となる南嶽懷讓禅師が入門し、慧能が「どこから来たのか」と尋ねると、南嶽が「はい。崇山から来ました」と答えました。さらに慧能が「その崇山からわしの所へ来たと言うのは、いったい誰なのか」と聞きますと、南嶽はグッと詰まって答えることができませんでした。南嶽はその答えを探すために八年間慧能のもとで修行し、八年目に大悟しました。それがこの「説以一物即不中」です。「説といて一物いちぶつに似たるも即すなわち中あたらず」。どう説明しようとしても説明できないという意味です。「崇山から来たのは誰か」と問われて、「はい、それは私です」と答えても、ではその私とは何ぞやとなると答えられないのです。言えは言うほどの外れになり、一つの固定観念にとらわれたら、それはもう迷いで、すべてはあるようにあると言うことです。と解説してありました。

さて、日常の診療を考えると、患者さんは自覚症状を言葉で正確に医者に伝えるのは難しいことだと思います。腹痛でも「ジクジク痛い」「重苦しく痛い」などいろいろな表現があり、医者と患者さんの間で症状を同じように理解し合うのは難しいことだと思います。カルテはできるだけ患者さんの訴える言葉で記載するようにしていますが、最近は高齢の方が多くなり、「説以一物即不中」以前の患者さんも来ます。診察に入ってきて、私「どうしましたか」患者さん「先生、アレなんですよ、アレアレ、ナンデスナー」となかなか次の言葉が出てこない。腹部に手を当てているのを見て、私「おなかが痛いんですか」患者さん「ソレソレ、ソレです、ウー」。

アレソレだけしか話さない方もいれば、診察に入ってくるなり、患者さん「入院をして手術をし、その後発熱、食欲がなくなり食べられない」など、10分近く息つく暇もなく話をして、私「それは大変ですね」患者さん「主人がそんなわけで、心配で眠れなくなり、眠れる薬が欲しいんです」となかなか本人の訴えまでにたどりつかないこともあります。病気の説明にしても、明解に答えられることは少なく、自分の力不足を棚に上げて「説以一物即不中」だからと都合よく考えています。

今年も禅語が頭から離れないと思いますが、本来の意味「あるがままに受けとめる」ように心がけようと思っています。

